

森の民 もりのたみ
5 ベトナム ★
カトウ族の村から

今回は、カトウ族の代表的な家や建物についてご紹介します。おもに4種類の建物があります。

カトウ族の住まい

集会所 (グンハウス)

カトウ族の言葉でグンハウスと呼ばれる集会所は、それぞれの村の中心に建ち、村の結束を示す建物です。人々の住宅は、このグンハウスを取り囲むように建てられています。

古代から伝えられてきた建築様式で、中央の一本柱と茅ぶきのどっしりとした屋根が特徴です。梁や壁には、鳥、水牛、トラなどの動物や竜などの架空の生き物、祭りや狩りなどの生活の場面が彫られています。天井には、かつて生けにえとしてささげた水牛や牛などの頭骨が掲げられています。

村での大切な決めごとや儀式などはいつもグンハウスで行われ、村の共有物や財産 (政府からの表彰状、祭り用の楽器など) が保管される場所でもあります。お年寄りから子どもまでが集い、お話を

集会所の前で踊るカトウ族



したりくつろいだりする情報交換や生活の場にもなっています。

住居

一昔前まで、カトウ族は、親子や祖父母など親類が一つの家族として、同じ家に住んでいました。現在は、日本と同じように核家族化しています。

最近のカトウ族は、たいてい二つの家を持っていて、一つはキン族と同じようにトタンでふいた屋根と板を張り合わせた壁でできた家。もう一つはカトウ族の伝統的な様式で、茅ぶきの屋根に割竹 (縦割りにした竹材) で壁と床をつくる高床式の家です。

伝統的な家には囲炉裏があり、料理をしたり、暖を取ったり、囲

炉裏の上に動物の肉や薬草などをつるしてくん製にしたりします。高床式なので風通しがよく、掃除も簡単に清潔です。床の隙間から落とした残飯などを床下で豚や鶏が食べ、とても機能的です。

別荘小屋 (ユイハウス)

カトウ族が住宅近くの庭や畑に建てるちょっとした「離れ」の小屋です。竹を中心とした素材で作られており、伝統的な高床の構造です。農作業の合間の休憩場所、昼寝場所、すずみ場、宴会の場などとして使われます。

お墓

これはカトウ族の死後の家です。カトウ族の人々は、まだ生

風通しのよい高床式

かぜとお



公益財団法人国際開発救援財団 (FIDR) 国際援助を行う民間の非政府組織 (NGO)。1990年設立。ベトナム、カンボジア、ネパールで現地の行政機関や団体と協力して、貧困状態にある人々の生活を向上するために支援しています。

きている間に自分の棺桶を用意して、今住んでいる高床式の住宅の床下に置いておきます。棺桶は大きな丸太をくりぬいて作ります。人が亡くなって棺桶に納められ、お葬式が済むと、住宅から離れた場所に建てられた小屋の下の土中に棺桶を埋めて安置します。この小屋の屋根には、カトウ族にとって「死」や「命」の象徴である水牛をはじめとしたさまざまな彫刻がほどこされています。亡くなった人への尊敬と畏敬の念を表して、お墓の周りに米、鶏、水牛などをお供えして見送るため、カトウ族のお墓はとても豪華です。(沖山尚美)



集会所で遊ぶ子どもたち

カトウ族の村へ行こう

参加者募集

春休みに国際支援現場を訪ねる国際学習ツアーを実施します。くわしくは、昨日の紙面または毎小のホームページをご覧ください。

世界史の現場で

97

仲が悪くなった発端

【1979年～81年アメリカ大使館占拠人質事件】

イラン

サウジアラビア

テヘラン

イラク

国名	イラン・イスラム共和国
首都	テヘラン
面積	約164.8万平方キロメートル
人口	約7479万9000万人 (2011年推定)
現地通貨	350リアル＝1円

中 東の産油国イランは長い間、アメリカと関係が悪いことで知られています。しかし、かつては全く逆で、アメリカと親密な国だったのです。その関係が一転したのが、1979年11月の在イラン・アメリカ大使館占拠人質事件です。昨年秋、この事件を題材にしたアメリカ映画「アルゴ」が日本でも公開され、話題になりました。

79年2月のイスラム革命では、イスラム教を重んじる人たちが、宗教を軸にした国づくりを目指し、パーレビ国王を追いつきました。「国王はアメリカの言いなりで、市民生活を考えず、ぜいたくばかりしている」と考えていたからです。アメリカは逃亡した国王を受け入れたため、革命に参加した若



テヘラン中心部にある旧アメリカ国大使館。現在は、イラン軍に関連した組織が建物を管理し、壁にはアメリカを悪く描いた絵があります

者らが怒り出し、大使館に乱入したのです。アメリカ人外交官ら52人を人質にとり、444日間も大使館を占拠しました。

国際的な決まりでは、大使館の敷地内は外国の領土と同じで、勝手に入る

ことは絶対に許されません。事件は世界中から非難を浴び、アメリカとイランの関係は完全に断絶してしまいました。

テヘランに住む評論家のアッバス・アブディさん(56)は当時22歳で、事件に参加しました。外国と距離を置き、自由で民主的な国づくりを目指していたと言います。しかし、革命後のイラン政府は、国王に代わり宗教指導者たちが絶大な権力を握りました。地方の発展や貧困の解消は進みましたが、民主化や経済発展は理想通りにはいきませんでした。

アブディさんは「事件は後悔していないが、こんな非民主的な国になるとは思っていなかった」と振り返ります。 【テヘラン・鶴塚健、写真も】